

世界一器用貧乏な私

秋兎

「恭華ちゃんは背も高いし、美人だからモデルになれるわね」

小学校五年生の時、友達の母親にそう言われた。当時の私は既に165センチ以上あり、クラスでも私より背の高い子はいなかった。また事実として私は世間一般よりは顔の造形が良かったようで、この頃から街を一人で歩いていると軟派な男達から声を掛けられるようになっていた。だけど自分の美貌というものに大したこだわりもなかった。周囲のいうように芸能界の扉を叩こうとは思わなかった。背が高いことや顔のパーツが少々整っていることなどは大したことに思えなかったからだ。それらは私が徒競走で一番か二番以外取ったことがないことや、テストで八十点以下を取ったことがないのと同じように思えた。嫌な言い方になるかもしれないが、人並みよりも少々優れていることが私にとっての普通だった。それは決して維持していこうと思ってそうしてきたわけではない。程々に物事に時間を費やした上での結果でしかなく、皆がそうであるように私もそうしていただけだ。決して並々ならない努力をしたことなんて、一度もなかった。

だからというわけではないかもしれないけれど、私よりも可愛い顔をした女の子も、テストで良い点を取る秀才も、県の選抜チームに選ばれるようなスポーツマンもいつだって存在していた。そして例外なくそういう人達は一番になれることにのめり込んでいた。私はいつしかそういったものを持っている人を羨ましく思うようになっていた。

「恭華さんは何でもできるから、やりたいことがたくさんあって迷うでしょう？」と当時の担任の先生に言われた。それが周囲から見た私の評価であると初めて知った。

——何でもできるのではなく、何も特別にできることも好きなこともないだけです。

本当は先生にそう言いたかった。

でも、言うことはできなかった。

同席していた母は私が誉められたことで、控えめながらも顔をほころばせていたのを見てしまったからだ。先生の誤解は幼い私にとって衝撃的なことだったが、私はその場の雰囲気壊してはいけないと思える程度の思考力もっていた。驚きを表情に出すことなく、先生や母にあわせてはにかんだように笑顔を作った。

「お母さん、私何も好きなことがないんだけど、どうしたらいいかな？」

帰り道、思いきって母に尋ねてみると母は何でもないことのように「そのうち見つかるわよ」と微笑んだ。私はその言葉を信じたが、結局小学校を卒業する頃になっても、夢中になれるような面白いものには出会えなかった。

小学校を卒業した後は、母の母校でもある櫻華女子大学附属の中等部へと入学することになった。世間ではお嬢様学校の名門と謳われてきたらしく、偏差値もなかなかのものらしい。校舎は建て替えたばかりで新しく、落ち着いた雰囲気が建物を見ただけでも伝わってくる。校門から式典などに使われる講堂までの道のりは桜並木になっていてとても綺麗だった。

部活動も始まるし、ここでならきっと——入学式の日、私の胸は確かに期待で一杯だった。

「ねえ、北条さんは試験の自信はある？」

まだ友達もおらずぼうっと始業のチャイムが鳴るまで待っていると、前の席の女子

に話しかけられた。入学して一週間程で学力診断テストを行うことになっていた。中学の授業をスムーズに行うための準備をすることが目的で、各自で学習をしてくると入学前にプリントが渡されていた。これが結構な枚数があり、そのプリントの類似問題を試験として行うらしい。

「まあまあ」と私が答えると、彼女は二週間も前から何時間も準備をしていることを少し疲弊した顔で語った。疲れた中にも勉強してきたという自信が、彼女の目に現れている。私は一途に努力できる彼女を尊敬し、また羨ましくも思った。

「北条さんはいつから勉強していたの？」という問いに対して、私は正直に自分の勉強時間を述べた。

「それだけで平気なの？」と彼女は心配そうに首を傾げる。そう言いながらも、どこか安堵していることが見て取れた。この子よりは勉強しているから、私は大丈夫だろうという気持ち。誰しもが持っている他者に対する優越感。それすらも私にとっては嫌悪ではなく、羨望の対象だった。

「うーん、自分としては大丈夫かなって……もしもできなかつたら、鉛筆でも転がそうかな」と本当に持っていた鉛筆を転がしてみせた。変わった奴だと思われたのか、彼女はおかしように笑っていた。今では、初めての友達になれるだろうかと淡い期待をしていた自分が愚かしい。優越感を抱くということは、その逆もありえるということに失念していた。

試験の結果が廊下に張り出された時、私の名前は彼女よりも十番も上にあつた。

成績の上位者だけが発表されるものとはいえ、この結果と私という人間の在り方を当時の彼女は受け入れることができなかつたみたいだ。あるいは私の言ったことが、嫌味として受けとめられてしまったのかもしれない。嘘をついて隠れて勉強する子だと思われた可能性もある。いずれにしても彼女のプライドを傷つけてしまったことだけは確からしい。

「なんか、知ってる問題が多くてさ。ラッキーだったんだよ」

自分でも白々しいフォローだと思っていた。隣で成績表を眺める彼女の面持ちは明らかに暗い。あの試験の日、充実した顔をしていたのが嘘のようだ。

「あっ……」

無言でその場から立ち去る彼女を見て、もう駄目だなとわかった。翌日から私と彼女は元通り席が前後であるだけの他人に戻り、挨拶を交わすこともしなくなった。

私はこれを教訓にし、以後は皆に合わせて嘘をつくことにした。円滑な友人関係を築かなければ、誰かが私に面白いことを教えてくれる可能性もなくなってしまう。何よりも女子だけの社会というのは、一人で生きていくには過酷すぎる。人並み以上の私でも、感受性だけは幸いなことに皆と同じだった。ありていに言えば、イジメだとか無視されるのは怖かったし嫌だった。

皆に合わせた物言いを心がけ、初期の失敗を繰り返すまいと努めた。お陰で友達もできて、とりあえず学校生活の滑り出しは順調といえた。

しかし直ぐに次の問題が私に降りかかってきた。

それは部活だった。入学時に最も期待していた部活だったが、それは入部する前から脆くも崩れ去った。だから皆が部活を決めていく中で、私だけはなかなかどこに入

部するか決めることができなかった。運動部も文化部も関係なく、全ての部を見学した。もちろん全く面白そうだな、と思うものがなかったわけではない。興味をひくものは幾つもあった。しかし三年間も同じものを続けられるかといえ、答えはノーしか浮かばない。まさか一週間毎にローテーションで部活を変えたいですと言うわけにもいかない。

気がつけば入部申請期間はとっくに過ぎ、校内でも希少な帰宅部になっていた。仕方がないので同じような帰宅部仲間と一緒に遊んだ。仲良くなった三人はやはり私とどこか似ており、何をやっても長続きしないからと言っていた。四人で広い校内を探検したり、下校時間まで教室でお喋りをしていた。いつからか感じていた焦りは、そうしている間は薄められた。何にも興味を持たないのは私だけじゃないという共感が、言葉にすることはなかったが私達を繋いでいるのは確かだった。

私は彼女達と遊ぶ以外に、入ってもいない部活動を冷やかしに行ってお暇を潰した。運動部は流石にどこも駄目だったが、文化部は部によっては人数も少ないので煙たがるどころか、快く私を迎えてくれるところもあった。月曜日は茶道部でお茶菓子を食べ、火曜日は文芸部で好きな本について語り合い、水曜日は演劇部の小道具作りを手伝ったりした。楽しい楽しい毎日だといえた。それなのに……望んでいた生活が現実になっても、なぜか心の奥にある満たされない気持ちは消えない。どうすれば良いのか、何をすれば私は楽になれるのだろうか。誰かに教えて欲しかった。

「ごめん、北条。そろそろ大会近くで西園寺先生も見に来るからさ」

そう言って演劇部の部長は私に向かって軽く手を合わせる。二年生になった秋のこと、そういえば去年の今頃も同じことを言われたのを思い出した。

「やだなあ、謝らないで下さいよ。私が勝手にお邪魔してるんですから」

演劇部はこの時期になると、市内で行われる演劇コンクールの本番に備えてそれはもう文化部とは思えないような特訓をしていた。

と、いうわけではないが流石に本番の一週間前になれば誰だって熱の入れ方も変わってくる。それはどこの部活も同じで、謝る部長の後ろでは部員達がいつもより真剣な眼差しで稽古に励んでいる。こういう時、どうしようもなく自分が部外者であることを実感させられた。

「今年は入賞できると良いですね」

「そうだね。頑張るよ！」

「講演の日、暇なので友達と観に行きますね」

櫻華はエスカレーター式とはいえ、中学生活では最後の公演となる。三年間の集大成で主役を務めるとするのは、どの様な気持ちなのだろうか。その気迫と情熱は、汗まみれのシャツから伝わってくる。

これ以上はここにはいられない。いれば満たされない心がもっと渴いていってしまう。

私はごきげんよう、と別に仕来りでもない挨拶をして踵を返す。体育館から立ち去るまで、背中に視線を感じたが振り返ることはしなかった。振り返れば、きっとあの部長は意を決して駆け寄ってくる。そして私の手を取って、こう言うだろう。

——今からでも、うちの部に入らない？

私が様々な部活に顔を出すようになってから半年、同学年の演劇部の子に言われたことがある。現部長が私のことを欲しがっているから、勧誘してくるかもしれないと。それを告げた彼女もまた、私に入部して欲しいと顔に書いてあった。背も高くて見栄えの良い役者が一人いれば、上演できる演目の幅は広がると同級生は語った。正直、こんな私に期待してくれることは嬉しかった。でも演劇に対して彼女達のように情熱を抱くことはできそうもなかった。だから曖昧に入部する意志はないことを匂わせるようにしていた。あくまでもお手伝いとして、部活に入りそこねた一生徒が無責任に様々な部活に首を突っ込んでいた。そういった認識を持ってもらえるように振舞った。

半端な気持ちで参加しては、団体で行うものには迷惑がかかるからと周りには告げるようにした。

もちろん詭弁だった。

今すぐにでもどこかの部活に所属してしまいたい気持ちは、日々押えきれない程膨れ上がっている。でも、入った後で飽きてしまったらどうすれば良いのだろうか？その時は私は自分という存在を認められなくなってしまいう気がした。何もできない人間として人生を送っていくなんて、絶望的すぎて笑えない。

ステージで練習する演劇部員達の声と、バスケット部が床を走る音が響いては消える。若いエネルギーというものがあるならば、体育館で奏でられるこの音楽はまさにそれだ。何の旋律もないけれど、その音すらも未だに発する場所のない私からすれば、ひどく美しく聴こえる。早くこの居たたまれない気持ちから解放されたくて、逃げ出すように体育館から飛び出した。

今日は先に帰って良いと告げたので、帰宅部の友達とはとっくに下校している。今頃は帰りの電車で揺られているころだろう。それぞれの家は近くにないで、今から集まっていたら遊ぶ時間がない。比較的自由的な帰宅部とはいえ、世間的にはお嬢様学校の評判で名高いところだ。あまり遅くまでの外出はどこの家も許してはくれない。

こんな時に、こんな時にこそ話し相手が欲しい。でも、それは蝙蝠のような生活を送る私には叶わない願望だ。

――どうして、私だけ何も見つからないのだろう。

項垂れ、ぼんやりと当てもなく歩く。それでも足は自宅の方へ向かおうと校門を目指す。

その途中、見慣れないジャージを着た女子生徒が数人に大きな白い立て看板を運んでいるのに出くわした。慎重なのか彼女達が非力で運ぶのが大変なのかは定かでないが、その歩調は決して速いとはいえない。皆一様にジャージの右肩には橙色の腕章を付けている。目の前を通りすぎていく女生徒達の腕をさり気なく確認する。『櫻華高校 生徒会』と印字されていた。

「ごめんねー、通行の邪魔だよー」

通り過ぎる際に、一人が私に向かって声をかけた。他の生徒達もごめんね、と続いて口を開く。

「もう疲れたよー、ミオちゃん」

「嘆かないの。あともう一枚だから頑張ろう！」

「ユイは根性ないねえー」

「えーん。だって重いよお」

賑やかに通り過ぎていく生徒会の人達を見送る。厚さはないし木製のようなので重量自体はさほどでもなさそうに見えたけど、大きなものは実際の重さ以上に運ぶのは大変なのかもしれない。

もう涼しい季節だというのに、彼女達の顔は上気していてうっすらと汗が滲んでいるようだった。おそらく何枚も同じものを運んでいるのだろう。時期的におそらく文化祭の準備でもしているに違いない。高等部の校舎の方へ遠ざかっていく彼女達を眺め、生徒会ってやっぱり雑用委員会なんだと思った。漫画やアニメに出てくるような強大な権力を持った生徒組織なんて絵空事。だとしても、一生懸命に木の板を運ぶ彼女達を思うと何となく寂しい気持ちになった。運動部でも文化部でもないのに活動している生徒会という組織は、私の退屈な学校生活の中で謎めいていて惹かれるものがあったからだ。中等部にも生徒会はあるが、お飾りに過ぎず生徒会長が式典の時に挨拶をするぐらいしか仕事はない。そのことを知った時に、立候補用紙はゴミ箱に捨てた。

ただただ退屈を埋める日々を送り、私は高等部へと進学した。三年間で友達以外に得たものはなく、得体のしれない気持ちは時間が経って濃んでいた。一年生や二年生の頃の何かに駆り立てられるような焦りはなくなった。その代わりに一生懸命な誰かに対して羨むことも少なくなった。私はとうとう何もできない自分に慣れてしまい、一線を超えたと感じた。

その反動からか私は誰よりも楽しそうに学校ではしているようになった。満たされなかった気持ちを刹那の快樂で埋めるように、下らないことを四六時中言い続け、加速度的に様々なことに手を出した。

――北条さんって何でもこなしてしまって、すごいわね。

――テストも毎回上位だし、運動部でもないのにリレーの選手には必ず入っているわよね。

何でもこなせる超人として、私は同学年から認識されるようになっていた。私がどこの部活にも入らないのは、櫻華程度のレベルでは満足できないからという噂さえ立っていた。どうしたらそんな発想をしてしまうのか不思議だったけれど、否定すると逆に信憑性を帯びてしまうこともある。幸いにも表立って何かをされることはなかった。大っぴらに噂を絶とうということはしなかった。中には気まぐれな天才少女と揶揄する声もあったが、本心を言えばどうでも良かった。

人は自分よりも優れた相手を貶めることはあっても、危害を加えようとする者は少ない。自らが劣っていることを自覚しているから、敵意を向けたところで返り討ちに遭うのが怖いのだろう。私なんて本当は何もできないことがない弱い人間だというのに、笑ってしまう。

高等部に上がってからも、私は帰宅部だった。高等部から入学してきた者にも、中

等部にはなかったクラブにも私の心が揺さぶられることはなかった。それでも私の噂を知ってか、仮入部期間の初めは毎日のように先輩達が勧誘活動に来ていた。「北条さんなら直ぐにレギュラーになれる」「一緒に部の歴史を塗り替えよう」「お茶菓子食べ放題」といった甘言を囁く先輩達をことごとく私は振り続けた。中等部から知り合いだった演劇部の先輩からも控えめに誘われたが丁重に断った。

「そう言うと思っていたのよね。だから、中等部の時も言えなかったわ」と恥ずかしそうに先輩は頬を掻いていた。これで心残りなく今の部員達で演劇をしていこうとふっ切ることができる、と言って先輩は去って行った。その後ろ姿を今度は私が見つめていた。私はもはや「待つて」と呼び止める気力もなくて、ただ立ち尽くしていた。

「帰宅部入部おめでとう！」

本入部届けを皆が出し始めた五月の初め、突然江利子が軽く拍手をした。一緒にお昼を食べていた二人も意地悪な笑みを浮かべて、それに倣った。三人とも中等部で共に帰宅部員として切磋琢磨した仲だった。そんな彼女達に何があったのかわからないが、それぞれ既に入部届けを提出していたらしい。それも三人とも違う部とはいえ運動部にだ。

「私達は引退してしまうけれど、帰宅部の伝統は恭華さんが守って行ってね」

江利子が鼻をすする。脇に座っていた蓉子がおもむろに鞆からティッシュを取り出して渡した。鼻をすすったのは江利子が花粉症だからであって、断じて悲しんでいるわけではない。

「どうして三人とも今更部活をするのよ？ 高校からじゃ経験者との差を埋めるのは大変じゃない」

私が半ば責めるような口調で聞いた。僅かではあるが置いていかれた、という気持ちがあったことは否定できない。三年間ただ遊んでいただけとはいえ、暇つぶしの相手がいなくなってしまうのは私にとって致命的だ。

「水泳ってダイエットに良さそうだから」と江利子が自分の二の腕をさする。

「あの弓道の長い袴に憧れるのよね」と蓉子はうっとりとして呟く。

「春休みに『エースを狙え』を読んでたら、やりたくなっちゃった」聖は単行本の一巻を鞆から覗かせた。

三人とも動機は違ったが、その綿飴のような軽さだけは同じだった。

「それだけの理由で？」

「それだけって、いけないことかしら」

「興味本位でやってみるっていうことが、恭華にはわからないのよ。なまじ何でも出来ちゃうからなんでしょうけど」

卵焼きを挟みながら、蓉子は私を指すように橋を動かす。華道の家元の娘がこれでは、さぞかし親御さんも苦労しているだろう。

「どういう意味よ？」

「やってみて自分がどの程度のことができるのか。そういうことが簡単に想像できちゃうし、面白さを見いだせないから熱中できるものが見つけれられない」

蓉子に続いて聖が言葉を続ける。

「恭華の最大の不幸は競争意識が低いことよね。何でも大した努力もしないで二番か

三番だから、一番の人に対して悔しさも劣等感も感じない」

見事に私の性質を言い当てられ、言葉が出てこなかった。ふらふらと一緒に遊んでいるだけだというのに、そこまでのことがわかってしまうものだろうか。更に追い討ちをかけるように江利子が口を開く。

「だからいつも面白いことはないかって探してるし、それを誰かに期待している。出会った頃からずっとね」

他の二人も賛同するように頷いた。そんなことまで、見破られていたなんて……素直に驚いた。

「そういう気持ちになるのって恭華だけじゃないけどね。私も今までは、ううん今だってその気持ちがわかるもの」

「江利子だけじゃないわ。私も聖だって同じ。だから実際、中等部の頃は部活に入らなかったしね」

聖が黙って頷いていた。

「でも気づいたのよ。待っていても、やみくもに探してもそういうのって見つからないんじゃないかって。一つのことを辛かったり苦しいと思う時があってもやってみないと、本当の面白さはわからないんじゃないかしら」という蓉子の言葉に私は何も言えない。返すべき答えを知っている者はこの中に誰もいないから。しかし私以外の三人はその答えを知ろうとしている。

「そっか……」

何気ないつもりで発した一言は、思った以上に暗い色を宿していた。そんなことにも気が回らない程、私は困惑していたのかもしれない。あるいは三人が相手だからこそ、自然と自分の感情が表に出てしまったのか。何か取り繕うと思っても、いつものように軽く口を回せない。

「私は蓉子みたいにそこまで真面目に考えてないけどね。本当にダイエットに良さそうだからやってみようと思うだけで」と江利子が明るい口調で茶化す。それを見て聖も「直ぐに辞めるかもしれないけどねー」とおどけて見せた。私はいよいよ独りぼっちなってしまったのだな、と他人事のように内心で大きくため息をついた。

それから話題はいつもの昼食時と同じ当り障りのないものに戻ったけれど、三人の言葉が私は頭から離れなかった。悩むのは時間の無駄だと思いつつも、面白いことを一緒に探す友達はいなくなってしまった。私には放課後という膨大な空白の時間だけが残された。以前のように気軽にどこかの部活に顔を出すこともできず、かといって街で遊ぶ気にもなれないので家に帰った。家に帰ってもすることがないので、ベッドの上に寝転んで天井をぼんやりと眺める。そのうちに眠ってしまい、家族に夕飯だと起こされる。生きているのか、死んでいるのかわからないような無為な時間。

私は表向きはそれまでと変わることなく振舞った。三人が部活に入ってもお昼は一緒に食べていた。ただ、四人揃ってお昼を食べる頻度は減ってしまった。部活のミーティングや、一年生が行わなければならない仕事で昼休みは抜けなければならないからと彼女達は申し訳なそうにした。それはグループに対する気遣いというよりは、一人ぼっちな私に対する気遣いのように思えた。古い環境から抜け出せない私を見捨てないでくれる彼女達は優しいな、と付き合っただけで四年目にしてしみじみと感謝した。

「恭華にも見つかるわ、自分のやりたいことが。だから諦めずに今まで通り色んなこ

とに首を突っ込むのよ」

六月のある日、蓉子はそう言って部活へと向かった。袴に憧れると話していた彼女は入部して二週間後には、「一年生はまだ着られないなんて説明会では言ってなかった」と憤慨していた。それでも毎日練習に行き、上級生の打った矢を的から抜いて集めたり、掛け声をかけているらしい。江利子も聖も同じように興味本位と言っていた部活に打ち込んでいた。

蓉子達が羨ましかった。

先輩の愚痴や練習の厳しさ、経験者との差を嘆く彼女達の声はどこか弾んでいた。

放課後の膨大な時間も、彼女達からすれば密度の濃い数時間でしかないのだろう。私だけが異次元にいて、違う時間の中を生きている。そんな風にすら思ってしまう時もある。この先私は何に出会うでもなく、身の丈でできる仕事や人生の選択を繰り返す。希望も意志もないままに、死ぬまでそうしていくのだろうか。

重い足取りで教室を出て、校門へと向かった。体操着やTシャツに着替えた生徒達がそれぞれの活動場所へと駆けていく。一年生は準備があるからどこの部活でも上級生より先に行かなければならない。そうした生徒達の数は校門に近づく度に減っていく。変わって私と同じ様にゆっくりと歩く制服姿が増えていく。一人で、あるいは友達と話しながら校門を抜けていく。太陽に照らされる彼女達の影は、部活に打ち込む生徒達のものよりも黒くて濃い気がした。内面の暗さが影となって伸びているような、そんな気がした。

同じように日の光を受けているのに、道の両端の植え込みから伸びる木々の緑は眩しい。私も植物だったら、こんなことで悩み続けることもなく、ただ大きく大きく成長することだけを考えて一生を終えることができただろう。一つのことだけを目的に生きていく、それはどんな気持ちなのだろうか。見当もつかない。春に満開の桜を咲かせていた一本を見上げた。

「もしもし」と声を掛けられたのはその時で、私は植物が話しかけてきたのかと錯覚した。振り返っても、誰もいなかったからだ。まさか本当に木の精霊か何かがと期待に満ちた想像をすることはなく、冷静に視線を下に向けた。私の身長は173センチと日本人女性としては伸びに伸びていたので、校内では振り返っても誰も視界に入らないことがよくあった。

「その木は毛虫が多いから、あまり近寄ると危ないわよ」

声を掛けてきたのは精霊ではなかったが、精霊のように美しい女子生徒だった。髪は陽光を受けて金色に輝き、大きな瞳は空を連想させるように澄んだ青色をしている。更に透けるような白い肌と林檎色の唇をしていて、まさに幼い頃に絵本で読んだ童話のお姫様そのものだった。ただ鼻だけがさほど高くないし、どことなく日本人っぽい感じもするからハーフなんだろう。小柄で西洋の人形を思わせる少女は、当然のことながらセーラー服に身を包んでいて不思議な姿に見えた。

「あなた、一年生の北条恭華さんよね？」

見た目に反しない可愛らしい声だったが、その口調は意外にもしっかりしたものだった。

「ええ、そうですけど。何か私に用事ですか」

部活にも委員会にも所属していない私にとって、先輩や後輩との接点はない。中等部の時に顔を出していた部活の先輩達とも、高等部に入ってからはずれ違って挨拶を交わす程度だ。用事などあるわけがないとわかっていたが、面白そうなのでそう答えることにした。

「もしも時間があるなら、ちょっと私と茶屋……じゃなくて、食堂でお茶でも飲まないかしら？」

こ、これは――まさか誘われてるの？ 私は胸が高鳴るのを感じた。無論、彼女にときめいたのではなく同性から軟派されるという稀有な展開にだ。

「いいですよ」と快諾すると、近衛と名乗った二年生は嬉しそうに微笑んだ。美しさと可愛さの同居したその表情は、不覚にもほんの少しだけ胸がキュンという音を立てたが、恋の始まりとかではないのであしからず。

「好きなものを頼んで。誘ったのだから奢るわよ」

そう言ってスカートのポケットから取り出したのは、全く近衛先輩には似合わないガマ口の財布だった。なぜガマ口と奢ってもらう身で突っ込むのも気が引けたので、私は見てみぬ振りをすることにした。

私はいちご牛乳を、先輩はほうじ茶の紙パックを選んだ。パックジュースを大事そうに両手で抱える姿は無邪気なお姫様そのもので、それだけに筆のような文字で描かれた「ほうじ茶」のロゴがおかしかった。あまりの不釣り合いさに私のいちご牛乳と交換しませんかと提案しようかと思った。

食堂にいる生徒の数はまばらで、私達は近くの空いているテーブルに向い合って座った。近衛先輩は小さな手で一生懸命紙パックを開けながら、いつも上手に口を開けられないと愚痴をこぼした。

しばらく取り留めもない話をした後に、彼女はほうじ茶をストローで一口啜った。

「それで本題なのだけれど、あなた何か部活動に参加してる？」

「してません」

近衛先輩が満足そうに頷いたところを見ると、この質問は予定調和なのだろう。

「北条さん、生徒会に入りなさい」

今まで数ある勧誘を受けたが、「入りなさい」と面と向かって言われたのは初めてだった。真剣な眼差しで私を見つめる近衛先輩は、革命軍に誘うジャンヌ・ダルクを彷彿とさせる。ガラス玉のような青い瞳はそれまでの先輩達の何倍も力強さがある。私がずっと焦がれ続けた、目標を持っている人の瞳だ。

なるほど、確かに外見はお姫様かもしれない。でも同じ童話の世界の住人でも、近衛先輩の中身は勇敢な王様や騎士なのだろう。見た目と反する自信に満ちた話し方もそのせいか。面白い、とっても面白い人に出会った。

でも――

「お断りします」と頭を下げる。この人が面白いからといって、生徒会が面白いとは限らない。強烈なカリスマは最初のうちは私の心を掴んでいるかもしれないが、慣れてしまえばその気持ちも薄れる。安易に承諾することはできない。

「理由があれば聞かせて欲しいわ」

近衛先輩は狼狽することも、落胆する素振りも見せなかった。顔色を変えることなく、私を見つめている。

「私、何やっても長続きしない性分なんです、直ぐ飽きちゃって、投げ出しちゃうんですよ。生徒会って自分達の活動っていうよりかは、生徒のために活動しますよね。そういう組織に私みたいな人間が一番向いてないし、迷惑になりますよ」

「人のことなんて関係ないわ。あなたに興味があるかないか、それを聞いているの」
「興味は……ありません」

いつか見た生徒会役員達の姿を思い出す。今となっては面倒くさい仕事を押しつけられているという印象しかない。とても面白そうだとは思えなかったと告げる。いつもならば当たり障りのないことを言って誤魔化するのだが、それは何故かできなかった。近衛先輩の瞳が何もかも見透かしてしまいそうな気がしたからだ

近衛先輩は黙って話を聞いた後に、生徒会の仕事について説明してくれた。生徒会の大切さと活動することの意義を、近衛先輩の言葉で教えてくれた。飾ることなく真摯に話す姿に、私は忘れていた気持ちを完全に思い出していた。膿んでいたはずの傷口が開き、悲鳴をあげるように訴え始める。

「やっぱり入る気にはならないかしら？」

「そう、ですね。非常に有意義で必要な組織であることはわかりましたけど……入ってみようとは思えません」

再三の勧誘が無駄骨に終わったことを悟ったのか、近衛先輩は大きく頷く。それでも嫌な顔一つせず、会った時と同じ様に微笑んだ。

「それじゃあ仕方ないわ。興味のない人を無理やり入れても仕方がないし」

そろそろ戻るわ、と先輩は腕時計を一瞥した。自分の腕時計で時間を確認すると、四時半だった。一時間以上もここで話していたのに、あっという間のように感じられた。時間を忘れる程真面目に会話したのは、もういつ以来のことだろうか。この愛らしいフランス人形の見たと凛々しい騎士の内面を持つ先輩に、私の心はすっかり魅了されていたようだ。

「いえ、こちらこそすいません。ありがとうございます、私のためにこんなに長くお話して頂いて」

「いいのよ、副会長なんてこれといってやることもないし。今の三年生は優秀すぎて私達下級生は仕事がないから、来年のために勧誘活動ぐらいはしないとね」

近衛先輩はそう言って、飲み終わった紙パックを畳んだ。やっぱり家で煎れるほうじ茶の方が美味しいわね、と呟いて立ち上がる。

「もしも気が変わったら、いつでも遊びに来てちょうだい。生徒会役員一同で歓迎するわ」

ずらりと生徒会室に並ぶ生徒会役員達を想像すると何だか可笑しかった。

「それは非常に恐縮ですね。逆に行きたくなっても、行けないような……」

「あら、それもそうね」

「そうですね。一介の生徒に対して、全員でなんて」

「一介の生徒ではないわよ」

「え？」

途端に先輩は笑顔を引っ込めて、真剣な顔で否定した。軽い気持ちで言った発言だったが、先輩はそう受け取らなかったようだ。

「櫻華に通う誰もが、かけがえのない生徒会の一員よ。私達は役員なんて肩書きがっ

いているけれど、生徒の代表としてお仕事をしているだけ。持っている権利も立場も他の生徒達と変わらないわ。だから、一介の生徒だなんて言い方をしては駄目よ。櫻花に通う者として誇りを持ちなさい」

これがカリスマ性というやつだろうか。こんなに芝居がかった台詞を言われているというのに、茶化すことはおろか曖昧に誤魔化すこともできなかった。それどころか先輩にそう言われると、素直に「はい」と頷いてしまいたくなる。先輩の思いはどうあれ、良い意味で私と同じ人間ではない。普通はこんなに情熱的に物事を初対面の人間に語れないし、ましてや何かを諭すことなんて出来っこない。

熱っぽい口調、感情の込められた言葉に私の心はかき乱されていた。それなのに何故か近衛先輩の一言一言を聞く度に、何年も癒されることのなかった痛みが治癒していくような気がした。

「北条さん」と近衛先輩が私を呼ぶ。

ただ苗字を呼ばただけなのにドキリとした。

「あなたは頭の回転も早いし、人よりも幾つも優れた部分を持っている。そのこと自体があなたを自暴自棄に追い込んでいるようだから、あえて言うけれど」

その後に続く先輩の言葉を今でも私は忘れない。

「世界一の器用貧乏、それが今のあなたよ」

冷静に考えれば突っ込みどころのある言葉だが、あまりにも先輩の顔が真面目だったので私はきょとんとして話を聞いているしかなかった。

「何でもできる人間というのはね、実は何もできない人間でもあるのよ。あなたは自分が夢中になれるものを探しているみたいだけど、何もできない人が自分が簡単にできることを探しているのと大差ないわ。二番か三番のままじゃ、あなたは一生心の穴を塞ぐことはできないわ」

近衛先輩は人差し指を立て、私の目の前に近づけた。細くて白い、高価なアンティークドールを彷彿とさせる指。

「確かにどれだけ努力したって一番になれない人はなれないのが現実よ。でも、あなたは一番になれる可能性を誰よりも多く持っているわ。だから、無駄に打ち込めることを探すよりも、まずは出来ることで一番になりなさい。私の勧誘の本当の目的はね、あなたのような人材ならば生徒会長に――この学校の生徒代表の一番先頭に立てると思ったからよ」

何度も熱弁を奮って流石に疲れたのか、喋り終わった近衛先輩は再び着席した。弁舌も態度も堂々たるものだが、体力は見た目通りのようだ。本当に面白い人だ。こんなにも魅力的で一生懸命で輝いている人を、私は初めて見た。それに世界一の器用貧乏という表現も気に入った。誰もが得体のしれないものを褒めるようにつけた「気まぐれな天才」よりも「世界一の器用貧乏」の方がしっくりと胸にくる。

「こんなこと言われたら、絶対に入るもんかって、思った、でしょうけど」

近衛先輩は上がってしまった息を整えようと、深呼吸を繰り返している。生徒会の仕事は正直面倒くさそうだったが、先輩と毎日話せるのならそれも悪くはないかもしれない。一番になりなさい、と面と向かって言ってくれる人だ。また私が下らないことで悩んでいても、力強い言葉をかけて助けてくれるに違いない。

——私のしたいことも、見つかるかもしれない。

「先輩」と私は呼びかける。これから口にするのは、私にとって挑戦の決意表明となるだろう。何年かぶりに胸が高鳴っていく音というものを、私は聴いていた。まだ心臓が生きていたことを実感し、目頭が熱くなる。でも人前で泣くのは恥ずかしいから、精一杯虚勢を張る。

「やっぱり見学してから入るかどうかは決めますよ」

近衛先輩は薄く笑った。私の発言の真意なんてお見通しよ、と言うような笑顔だ。

「善は急げよ。今から案内してあげる」

先輩は私の手を取って立ち上がる。私よりもずっと小さな手なのに、とても温かくて引っ張られる力が心地良かった。夕暮れの校舎で手を引かれながら、私は新しい世界へと向かっていく。自分がこれまでずっと追いつけてきた面白いことを、打ち込めることを作るために。

生徒会室の扉の前で、先輩は手を離れた。そしてドアノブに手をかけたところで、思い出したようにこちらを向いた。

「ようこそ、櫻華学園高等部生徒会へ。歓迎するわ」

恭しくお辞儀をした後に先輩は「こんなこと本当はしないんだけどね」といたずらっぽく微笑んだ。

窓辺から差す夕日に照らされる私は運動着でこそないが、憧れた彼女達と同じ顔をしている。

たぶん、そうに違いない。

「——という話があったのよ」

私は懐かしい思い出を語り終え、大きく伸びをした。あれから一年が経ち、いつの間にか生徒会副会長に私はなり、近衛先輩は生徒会長になっていた。生徒会に入ってよりお互いのことを知ってから、諸手を挙げて先輩を尊敬する気持ちはなくなった。あの時の私は先輩という存在が理想の象徴のように映っていて、一人の人間としては見えていなかったのだと思う。もちろん尊敬の気持ちがなくなったわけではない。これは念のために言っておかなくては。

「北条先輩にもそんな繊細な時があったんですねえ」

意外意外と呟く夏目の横では、ひなちゃんが目をキラキラさせて口元を抑えていた。その両手から「このほう」だとか「禁断の」といった怪しげなワードが漏れていた。何が彼女の琴線に触れたかわからないが、こういう表情をしている時のひなちゃんは、例外なく耽美な妄想を膨らませているので納まるまで待つしかない。

更にその隣では一条が顔をしかめていた。私が視線を向けると、いつも逆立った髪型の頭を掻きながら口を開く。

「なあ、何で会長は北条先輩のことにやたら詳しくったんだ？ まるで先輩のことずっと知ってるみたいに悩みとか言い当てたりしたんだろ、初対面なのによお」

「鋭いねえ、一条。もちろん会長は洞察力に長けているとはいえ、超能力者じゃないからね。事前に情報を得ていたんだよ」

「誰からだよ？ だって二人はその時に初めて会ったんだろ」

「実はね、私の友達の蓉子と先輩は従姉妹同士だったんだ」

そこまで言う三人の中で一番察しの良い夏目は、ああと納得したように頷く。ひなちゃんと一条はまだ意味がわからないという顔をしている。

「簡単な話だよ。先輩のお母さんと蓉子のお母さんが姉妹だったのさ。蓉子の御両親は日本人同士だし、先輩はあの通りの容姿でしょう？ 完全に赤の他人にしか見えないから気付かなかったのよ」

「確かに」と一条は唸り、ひなちゃんは「運命ってあるんですね」と大袈裟に感動していた。そして、またもや「魅惑の三角関係」という呪文めいたことをぶつぶつと呟き始めた。

「さ、これで私の素敵な思い出の話はお終いだ。怖い会長様が来る前にお仕事に戻ってくださいーい」

私が手を叩いて解散を促すと同時に、背中越しに誰かの気配を感じた。

「怖い会長様でごめんなさいね」

目の前の三人は危機を察してか。わざとらしく「頑張るぞー」と言って座っていたソファから逃げていく。残された私は手を合わせたまま、恐怖で振り返ることもできずに硬直していた。まさに神に助けを乞おうと祈りたい気持ちでいっぱいだったが、現実はそう甘くはない。

軽やか足取りで私の横に立つと、その声の主は冷ややかに耳元で告げた。

「体育祭の一週間前だというのに応接用のソファで後輩達と雑談する余裕があるなんて、流石は世界一の器用貧乏さんね」

「あらあ、聞いてらしたんですか先輩様」

「最後の方だけね。葵がいないから先生との打ち合わせを早めに切り上げたら、案の定あなた達の談笑する声が聞こえてきてね」

「アハハハ」と乾いた笑い声をあげてみたが、場の空気が緩むことは当然なかった。

「怖い先輩は早くいなくなった方が良いでしょう？ お望みならば生徒会長の椅子だってあなたにあげるわよ」

恭華、とそこだけ強調するように呼びかけられると、まるでナイフでも突きつけられた気分になってしまう。

「恐縮です！ 謹んでお断りさせて頂くであります。自分は未だ生徒会長になれる器ではありませんので」

「だったら――」

怒鳴られる、とあって耳を塞ぐ。

しかし意外にもお叱りの雷は落ちてこなかった。

「――サボってないでさっさと仕事なさい。体育祭の実行委員長はあなたなのだから」

代わりに近衛先輩の手が、ぽんと私の両肩に置かれる。困惑した私は思わず反射的に、首だけで後ろを振り返った。

「あなたが次の会長なんだから、しっかりしてもらわないと困るわ」と言った近衛先輩の顔は悪戯した子供を叱る母親のようだった。この人にはずっと敵わないんだろうなと思わせられた。

「近衛先輩……鬼の霍乱ですか？」

それが何だか悔しいと思う反面、敵わない相手であって欲しいとも願ってしまう。

「馬鹿なこと言っていると、本当に怒るわよ」

軽く頭を小突き、先輩は早々に撤退していた後輩達の方へ向き直る。

「あなた達も駄目な先輩に誘惑されたりしないで、しっかり仕事をする事。特に一条君は史上初の庶務としてやる事がたくさんあるんだから」

「また俺ばかり仕事すんのかよ」

「文句を言わない。その大きな体を人のために使わないでどうするの？ わかったら結果を記録する模造紙を購買部で買ってきてちょうだい」

「……へいへい。ったく、めんどくせえな」

そう言いながらも一条は「行ってらっしゃい」と手を振っていた夏目を拉致するように引きずり、生徒会室を出て行った。慌ててひなちゃんがその後を追って出て行く。やはり先輩の言葉には力があるなと思う。言葉だけでなく佇まいにも、仕草にも。私よりも20センチも小さなその背中には、この学園への愛とか、生徒会活動への熱意がいっぱい詰まっているのだろう。

あの頃の私が望んでいた夢中になれるものは、こんなに楽しい生徒会でもまだ見つからない。いや、見つかっているけれどそこに至っていないのだ。たった一つの、私にとっての自慢になるもの。一番の証明となるものは、私の憧れの先輩から受け継ぐものだ。だからもっと努力しなければいけない。そうでなければ、届かないものがあることを近衛先輩の背中を見て改めて実感した。

「先輩」

まだ何かあるの、と振り返った先輩の目の前に手を差し出す。突然握手を求められ、怪訝そうな顔で私を見上げた。

「これからもご指導ご鞭撻のほど」

挑戦的に笑うと、近衛先輩も口角を吊り上げて握手に応じてくれた。

「あと一年、ビシビシしごくからね」

握った先輩の手はやっぱり小さくて、お人形さんのようだ。

でも、あの日と同じ温もりが確かにそこに感じられた。